

想うがままに

ぼくらが失ったもの

本誌編集委員 小寺山康雄

ぼくは滅多なことでは浮気しない。

米屋、酒屋、煙草屋、八百屋、肉屋、漬物屋、豆腐屋、茶舗、電器店、服飾店、本屋、喫茶店、散髪屋、飯屋、そして飲み屋。よほどのことがないかぎり行きつけの店を変えることはない。

専門店が消えてしまった

ついでにいうと、四〇年間、女房はずっと同じ人だし、五〇年間左翼を張り続けている。女房の容色は衰えたし、ソ連邦も崩壊した。けれども、ぼくは女房、マルクス、グラムシから気を移す

など考えたこともないのである。

話を戻すと、一昔前は肉は塊でもスライスでも注文次第、魚は一匹丸ごと売っていて、頼めばさばいてくれた。八百屋は旬の野菜、漬物屋と豆腐屋は自家製が当たり前だった。電器店の店主は、器具の修理はその場でやれたし、亡母のために階段と風呂の手すりをつけてくれ、二〇年前のタイガース二年ぶり優勝のときには勝ち試合全部をビデオ録画してプレゼントしてくれた。散髪屋のおぼはんは一〇年前にぼくが咯血して入院したとき、病院に

散髪しに行くといつてきかなかった。

散髪屋はまだしも細々と続いているが、肉屋、魚屋、八百屋、漬物屋、豆腐屋、茶舗はスーパーに駆逐され、喫茶店はマクドに追いやられ、電器店は店主が突然死。みんな廃業してしまった。

ぼくの場合は極端な例かもしれないが、客と店との関係は貨幣関係が唯一であるスーパーに対して、こうした個人商店では金銭に換算されないなじみの関係、つまり人と人の信頼・友好関係が成立していたものである。スーパーにくらべて少々値は張っても、消費

者は専門店特有のサービスに付加価値を認めていたのだ。

ところがここ十数年の間に、こうした関係は煩わしいとして疎んじる傾向が蔓延してきた。人間関係をすべて貨幣関係に還元するとともに、「安い、速い、便利」が至上価値になった。究極の資本主義の到来である。それによって衰退したのは市場や専門店だけではない。この国が世界に誇るべきものづくり技術や農業、労働の多様性・柔軟性・裁量性が著しく減退してしまった。グローバル리즘は国民経済の頭部にとどまらず、この国の産業と社会、労働と生活の隅々に浸潤し、人びとの価値意識まで支配するようになった。

子どもの世界の荒廃やJ・R西日本の大惨事は、このような社会的風潮が招いた必然的帰結だと、ぼくは思う。

多くの事務所は大阪一、ということ日本一猥雑な街中にある。ノーパン喫茶、ピンサロなどえぐい商いはこの

街が元祖である。しかし、「シヨツカク（職業革命家）」になるために、この街に出てきてから四〇年、引越しこそしたが、ぼくは一度もこの街を離れていない。げびて、みだらだが、いかにも大阪らしいしたたかな息吹きが充滿するこの街は、ぼくにびつたりなのだ。

左翼御用達のバーも消えた

この街にスタンドバー『啓』が開業したのは一九六二年、たった六坪の店だった。カウンターの椅子は五つ、その後ろに三人掛けの床几。八人以上客が来ると、ママが寝所になっている二階への階段に、まるで武者人形のように四人が順番に座る。武者人形にされると、火事が起こったら焼死すること必定だから、生命がけで飲まねばならなかった。そのうえ満席になると、ママは動けないから客がグラスと皿の上を下ろしを順繰りさせられる。

この店に勝部元さん（元桃山学院大

学学長、イギリスで始まったニューレフト運動の紹介者、第一次・第二次『現代の理論』の論客）に初めて連れて行ってもらったのは一九六五年である。勝部さんは、ぼくのシヨツカク修行開始のお祝いをしてくれたのだ。助平な勝部さんは「ホテル（一帯は連れ込みホテルだらけだった）で腹上死したら、この店で死んだことにしてくれ」と、真顔でママに頼んでいたのに、ありきたりの病気でええなく病院で死んだのはさぞかし無念だったろう。

九五年に廃業してしまった新左翼御用達の本屋『曾根崎書店』は、『啓』から指呼の間にあった。これまたたった四坪の店だったのに、第二次『現代の理論』のバックナンバーを一番目立つところに置かしてくれた。ぼくは二つの店を野坂昭如流に「焼け跡闇市バー（書店）」と名づけて、面白がっていた。

『啓』のママは左翼シンパのせいかどうか、口が悪くて、客としゃっちゅう

喧嘩する。それに煽られて客同士も喧嘩し、あるいは果てしなく論争するのだ。これでは営業妨害だと気づいた、左翼でも比較的まともな客がなあなあで収めようとすると、ママが「ええかげんなどころでやめんととき」と、火に油を注ぐ。これではふつうの市民は寄りつかず、いつ行っても喧嘩と論争のカモを探している血走った眼の左翼がたむろしていた。

そんな『啓』がバブルに乗じて、カウンター八席、ボックス一八席のスナックバーに出世した。出世したため座っただけで五〇〇〇円とくるから、客はいつの間にかスーツとネクタイの社用族が主流になった。彼ら彼女らは論争どころか会話もしない。ひたすらカラオケで唄い、唄い終わるとさっさと出ていく。こうして『啓』は左翼御用達から左翼お断りの店に模様替えしてしまい、ぼくの足は自然に遠のいた。

バブルが崩壊して数年たったある

日、久しぶりに『啓』をのぞいてみた。その日は閉店まで客はぼく一人だった。座っただけで五〇〇〇円が一〇〇〇円に「価格破壊」していたというのに。義理と人情のほくほくは、それからまた足繁く通うようになったが、客はぼく一人の日が珍しいことではなかった。そして、今年三月、ついに『啓』は四年の歴史に幕を降ろした。

そして人と人の紐帯も消えた

スパーでは惣菜はまだしも、おろし大根や刻み葱までパックで売っている。最近では、骨なし魚というものであらわれた。無駄を省いて効率よしということだろうが、これではおろした残りの大根を煮付けたら、漬け物にする智慧は身につかない。魚の骨の出しや滋養分はあらかじめ排除しておきながら、カルシウムを健康食品で補う愚に気づかないのだろうか。

対面商法の煩わしさからは解放され

るかわりに、売り手と買い手のやりとりの楽しさ。人と人の関係術、売り手の商品知識から学ぶこと。人と自然の関係学を失ってしまうのである。

飲み屋は人生を語り、世を憂い、政治に憤り、ときには恋する場から、やみくもに騒ぎ、カラオケの順番を争うだけの場になってしまった。群れてはいても一人一人の紐帯は木綿糸より不確かなった世相が飲み屋にも反映しているのだ。

不確かな世相に漠然と不安を感じた人びとは紐帯を一本一本編み上げる思想性や根気を厭う。それでいて「強い国家たれ」と煽る言説に軽々しくとびつく。時代はそこまできていると、ぼくは思う。

こころやま やすお

一九四〇年神戸生まれ。七七年〜八八年、「社会主義と労働運動」誌編集長。市民の政治新聞「ACT」に「コラム」いずみ」を連載中。